

正 信 念 仏 僥 26

■曇鸞讚④

惑染凡夫信心發
証知生死即涅槃
必至無量光明土
諸有衆生皆普化

惑染の凡夫、信心發すれば、
生死すなはち涅槃なりと証知せしむ。
かならず無量光明土に至れば、
諸有の衆生みなあまねく化すといへり。

現代語訳

煩惱具足の凡夫でもこの信心を得たなら、仏のさとりを開くことができる。はかり知れない光明の浄土に至ると、あらゆる迷いの衆生を導くことができる、と述べられた。

~~~~~  
※今回の四句は「往還回向由他力」の内容が示される。

### 前回のあらすじ

往還回向由他力 正定之因唯信心

(往還の回向は他力による。正定の因はただ信心なり)

- ・**往相回向**=衆生が浄土へ往生する因である行信も、往生成仏の証果もすべて阿弥陀仏から施し与えられたものであるとする。
- ・**還相回向**=往生成仏の証果を開いた者が示す還相の活動は、阿弥陀仏から施し与えられたものであるとする。

### ○「惑染凡夫信心發」（第十八願・至心信樂の願）

#### 第十八願

わたしが仏になるとき、すべての人々が心から信じて、わたしの国に生れたいと願い、わずか十回でも念佛して、もし生れることができないようなら、わたしは決してさとりを開きません。ただし、五逆の罪を犯したり、仏の教えを謗るものだけは除かれます。

「易行道」とは、いはく、ただ信仏の因縁をもつて浄土に生ぜんと願すれば、  
仏願力に乗じて、すなはちかの清浄の土に往生を得、仏力住持して、すなはち  
大乗正定の聚に入る。正定はすなはちこれ阿毘跋致なり。たとへば水路に船に乘すればすなはち楽しきがごとこの『無量寿經優婆提舍』（浄土論）は、けだし上衍の極致、不退の風航なるものなり。（『往生論註』／『七祖篇』47）

### ○「証知生死即涅槃」（第十一願・必至滅度の願）

#### 第十一願

わたしが仏になるとき、わたしの国の天人や人々が正定聚に入り、必ずさとりを得ることがないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

生死=迷いの世界

涅槃=悟りの世界

「道」とは無礙道なり。『経』（華厳經・意）にのたまはく、「十方の無礙人、一道より生死を出づ」と。「一道」とは一無礙道なり。「無礙」とは、いはく、生死すなはちこれ涅槃と知るなり。かくのごとき等の入不二の法門は、無礙の相なり。（曇鸞大師『往生論註』／『七祖篇』155）

必ず安樂国に往生を得れば、生死すなわち是れ大涅槃なり。則ち易行道なり、他力と名づくとのたまへり（親鸞聖人『入出二門偈』／『註釈版』550）

⇒「証知生死即涅槃」とは、淨土往生によって得る仏果

### ○「必至無量光明土 諸有衆生皆普化」（第二十二願・還相回向の願）

#### 第二十二願

わたしが仏になるとき、他の仏がたの國の菩薩たちが、わたしの國に生れてくれば、必ず菩薩の最上の位である一生補處の位に至らせよう。それぞれの希望によって、自由自在に人々を導くため、固い決意に身を包んで多くの功德を積み、すべてのものを救い、仏がたの國に行って菩薩の行を修め、すべての世界の仏がたを供養し、数限りない人々を導いて、この上ないさとりを得させることも自由にできる。すなわち、通常に超えすぐれて菩薩の徳をすべてそなえ、大いなる慈悲の行を実践できる。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

『淨土和讃』（『註釈版』560）

安樂淨土にいたる人 五濁惡世にかへりては  
釈迦牟尼仏のごとくにて 利益衆生はきはもなし

南無阿弥陀仏の回向の 恩徳広大不思議にて

往相回向の利益には 還相回向に回入せり（『正像末和讃』／『註釈版』609）

#### 「往還回向由他力」以下六句・・・

淨土真宗とは、私たちが淨土に生まれさせていただく因も、淨土に生まれて仏のさとりを得させていただく果も、迷いの世界に還りきて人々を救うはたらきも、全て阿弥陀如来の他力回向（本願力回向）によって成立する仏道である。